

## オリンピック大会、国民体育大会における 成績評価原理の比較研究

佐 藤 光 毅

オリンピック大会は個人成績評価制を、国民体育大会は団体成績評価制を実施しているが、大会は同じ総合体育大会でありながら、成績評価方法は全く違うものを使用しているのは注目に値する。一方は個人にとどめるべきであるというのに、他方は団体を評価しているのである。オリンピック大会やアジア大会は個人の成績を評価するオリンピック優勝方式を取っているのに対して、大英帝国競技大会、パン・アメリカン国際競技大会、国際女子競技大会、国際学生競技大会、全ソビエト体育大会は団体の成績を評価する総得点方式を使用している。

本研究において述べる成績評価方式は、教育学部紀要第19号の岩渕の論文『Olympic Games 等における成績評価方式の体系化に関する研究（第1報）<sup>m</sup>』の第1表にある(3)と(4)である。

配点基準を使用する総合優勝制を述べるために、次に第I表として成績評価の原理、方法、結果の比較の表を示す。

第1表、オリンピック大会、国民体育大会の成績評価の原理、方法、結果の比較

総合体育大会	(1) 原 理	(2) 方 法		(3) 結 果
	優 勝 制 度	成 績 評 価 方 法		表 彰
		方 式 の 名 称	方 法	
オリンピック大会 ア ジ ア 大 会	個人優勝制	オリンピック優勝方式	(1), 種目毎にルールによる 勝敗または順位によって 個人の成績順位をきめ る。  (2), 上位入賞に金・銀・銅 メダルを与える。	優 勝→金メダル+国旗+国歌 第2位→銀メダル+国旗 第3位→銅メダル+国旗
国 民 体 育 大 会	団体優勝制	総 得 点 方 式	(1), オリンピック優勝方式 の(1)に同じ。 (2), オリンピック優勝方式 の成績順位を、配点基準 によって点数化する。 (3), (2)の得点が最も多い県 を優勝とし、総合順位を 出す。 (4), 優勝県に天皇杯、皇后 杯を授与する。	県の総合第1位→天皇杯(男女) 皇后杯(女) 第2位以下 →賞状の授与

方法のところを見ると、オリンピック優勝方式は種目毎にルールによる勝敗または順位によって個人の成績順位をきめるのに対して、総得点方式はこのオリンピック優勝方式の成績順位を、配点基準<sup>(8)</sup>によって点数化するのであり、そして、この得点を合計して総得点とし、総得点の多少によって総合順位を決定するのである。すなわち、オリンピック優勝方式と総得点方式との最も違う方法は、配点基準によって点数化することである。

総得点方式は岩渕の研究<sup>(4)</sup>によると、非常に高い相関のあることが知られている。大人口県有利は、国民体育大会を開催する県には、地域予選を経ないで正式種目、31種目に全部出場できる特権を与えているのであるが、この特権よりも一層強大なものとなっているのである。先に述べた岩渕の論文の第1表<sup>m</sup>の各方式を、実際の

大会に使用する場合の該当を示したのが第2表である。オリンピック優勝方式は最も低い[1]の段階の大会からオリンピック大会まで使用されるが，総得点方式はオリンピック大会には使用されない。このようにオリンピック大会は1つの方式より使用されないが，国民体育大会にこれらの方式を使用しようと思えば13種類も使用できるのがわかる。先にも述べた如く，オリンピック大会は個人の成績評価制になるが故に，唯一の方式に限定される宿命をになわされているのである。ここにおいて，何故に此の両方式は，このように成績評価の方式を違わせなければならないのかの原理を考察する。

第2表，総合体育大会における成績評価方式の該当表

団体区分	水準	大会の種類 各方式の番号	個人成績 評価制 1 2 3 4	団 体 成 績 評 価 制																									
				順位表示 による総合 優勝制	種目数限定 による総合 優勝制	配点基準を使用する総合優勝制																							
						①		②				③				④													
				5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26				
小団体総合体育大会	①	家庭内体育大会	1 2 3					9			12																		
	②	家庭対抗体育大会	1 2 3		5	6	7	9			12																		
	③	隣組内体育大会	2 3		5	6	7	8	9	10	12																		
	④	町・部落体育大会	2 3 4		5	6	7	8	9	10	12	13					17	18						24	25	26			
	⑤	市民体育大会	2 3 4		5	6	7	8	9	10	12	13	14	15	16	17	18							24	25	26			
	⑥	都市対抗体育大会	3 4		5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	18							24	25	26			
中団体総合体育大会	⑦	県民体育大会	3 4		5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	18							25	26				
	⑧	都道府県対抗体育大会	3 4		5	6	7		9	10	11	12	13		16								25	26					
	⑨	北奥羽大会	3 4		5	6	7		9	10	11	12	13		16								25	26					
大団体総合体育大会	⑩	道州制対抗体育大会	3 4		5	6	7		9	10	11	12	13		16								25	26					
	⑪	国民体育大会	3 4		5	6	7		9	10	11	12	13		16								25	26					
国際団体総合体育大会	⑫	アジア大会	3																										
	⑬	オリンピック大会	3																										

第1表の(1)の原理をみると，個人優勝制と団体優勝制の2つがあって，これにはそれぞれオリンピック優勝方式，総得点方式がその中にはいるが，方法のところでは，配点基準によって点数化するかしないかによってこの両者に差がつくのがわかるのである。オリンピック大会はたんに順位がきまれば良いとする方式であるのに，国民体育大会はそれに満足しえず順位に得点を与えて各県の成績に対し優劣をつけるのである。同じ総合体育大会でありながら，全く違う成績評価方式を実施しているのであるが，その理由はいかなるものがあるであろうか。この点についての重要因子を第3表に示す。

第3表，オリンピック大会，国民体育大会の成績評価原理を決定するにあたって，重大なる影響を与えると考えられる因子表

重 要 因 子						オリ ン ピ ッ ク 大 会			国 民 体 育 大 会							
国家または県の対立意識 人政治種別差 政生活育的信用標準差 教活水程差						極	め	て	有	り	り	極	め	て	な	し
									有	り	り				な	し
									有	り	り				な	し
									有	り	り				な	し
									有	り	り				な	し
ス ポ ー ツ	普 及 水 準 差								有	り					な	し
	技 術 水 準 差								有	り					な	し
	アマチュアリズムの疑義の解釈の統一					極	め	て	困	難		比	較	的	容	易

一見してわかることは、同じ総合体育大会でありながらこの両者は同床異夢の間がらというか、重要因子との関係が全く違うということである。オリンピック大会にあっては全部が有りであり、国民体育大会はなし、あっても僅少であって、全く反対になっている。特に国家または県の対立意識、アマチュアリズムの疑義の解釈の統一は極端に反対の関係にあるのがわかる。同じ大会目的を持ちながら、異民族集団によるオリンピック大会と同一民族間で行なわれる国民体育大会とでは、評価の根拠を異にし成績評価の原理は根本的に相反する立場をとると考える。

このように成績評価の原理を異にするがために、この両大会は異なる方式を使用すると考えるが、これのために、この関係を第4表によって示す。

第4表、成績評価方式決定のための関係表

	スポーツ選手権大会の様相	オリンピック大会	国民体育大会
④ 原因 ↓ 結果	スポーツ選手権大会の寄せ集め	... である  故に オリンピック優勝方式を取る	でない  故に 総得点方式を取る
⑤ 理   由	スポーツ選手権大会の寄せ集め  意気あがり、盛り上がる大会	であるが  になる  なぜならば 異民族、国家の代表選手として、民族意識による競争心の高揚が充分に見られる。したがって、オリンピック優勝方式を実施する。	でないが  になる  なぜならば 各県代表は同一民族ではあるが、競争意識が乏しく、ために総得点方式によってこれを激励するのである。

オリンピック大会はスポーツ選手権大会の寄せ集めであるが故にオリンピック優勝方式を使用し、国民体育大会はスポーツ選手権大会の寄せ集めでないが故に総得点方式を実施すると書かれているが、この見解は、成績評価方式の理論としては正しいが、実際は必ずしもそのようにならない。オリンピック大会はスポーツ選手権大会よりはるかに多くを意図し極めて重大なる意義をもつ大会であるがために、たんなるスポーツ選手権大会の寄せ集めの大会とはならないのであり、いうなれば、必然的に種目別の選手権大会の様相を持つオリンピック優勝方式は、個人優勝制から脱して団体優勝制に転じなければならない理屈である。

かように考えてくると、オリンピック大会は、

- (1) スポーツ選手権大会の寄せ集めであるかないか。
- (2) オリンピック大会の参加選手は個人としての参加か、国家から選出された代表選手か。
- (3) オリンピック大会は国家間の競争であるかないか。

等の問題が、重要な意味を持つことがらとして登場してくる。

総合体育大会が持っている本来の立場、本質からすると、このことは次の如く解釈されるべきである。オリンピック大会、国民体育大会はスポーツ選手権大会の寄せ集めであるとする立場、見解は、大会に参加する資格は個人としての資格でありそれは個人優勝制を主張する見解となり、これに対して寄せ集めでないとする立場、見解は参加資格は団体の代表であり団体優勝制を主張する見解となる。郷土の名誉を双肩になつた県代表、国家の名声にかけてその代表となった選手諸君は、全体の中の県の成績がいかなる水準にあるかを知りたいであろうし、国威、国力の表徴とも考えられる総合成績を知りたいと思うのはむしろ当然であり、個人としての資格で参加したものには個人の成績を知る権利があるといえよう。スポーツ選手権大会の寄せ集めである総合体育大会は、各種目における技術が最高度に発揮されたものを知るだけで良く、したがって、その成績評価方式は個人優勝制にとどまり、スポーツ選手権大会の寄せ集めでないより多くを意図した総合

体育大会は、参加選手は団体の代表となりその名誉のために団体優勝制を取ると考える。スポーツ選手権大会は技術水準の追求を第1目的とし、総合体育大会は普及水準の向上を第1目的とするかぎり、スポーツ選手権大会の寄せ集めであるとする総合体育大会は技術水準の追求をオリンピック優勝方式によって求め、寄せ集めでないとする総合体育大会は普及水準の向上を総得点方式によって団体の成績の評価を求めると考える。

このように、寄せ集めである総合体育大会であっても、また、寄せ集めでない総合体育大会でも、総合体育大会としての実施形態に差の大小はほとんどないと考える。総合体育大会の成績評価方式を決定するに当たって常にかわらない影響を与えるものは、参加選手の背景をなす構成団体の内容そのものであり、それは既に第3表の重要因子表に紹介した通りである。

オリンピック大会は明らかにスポーツ選手権大会の寄せ集めではないのであり、オリンピック・ムーブメントによって高邁なる理想を実現すべく偉大なる実績を残している数少ない国際機関の1つであるとはいえ、その成績評価方式を決定するにあたっては、重大なる影響を与えられとされる第3表の重要因子を考慮におかないわけにはいかない、というよりも、これを絶対に無視できないのである。

第4表のB欄はA欄を受けて、オリンピック大会のオリンピック優勝方式は、異民族、国家の代表として民族意識による競争心の高揚が十分にみられ、大会は意気のあがる盛りあがりのある大会となるとしている。また、国民体育大会の総得点方式は、各県代表は同一民族ではあるが、競争意識にとぼしいために、総得点方式によってこれを激励するとしている。第3表の重要因子が、オリンピック大会にあっては全部が有り、特に国家または県の対立意識とアマチュアリズムの疑義の解釈の統一問題において極端に差が認められることから、オリンピック大会はスポーツ選手権大会の寄せ集めでないのに寄せ集めであるが如くよそおってオリンピック優勝方式を実施し国家間の対立を防止する手段をとっているのである。オリンピック大会の第1目的を実際に即して遂行するために、すなわち、国家間の対立意識の防止やアマチュアリズムの解釈の困難さからも、スポーツ選手権大会の寄せ集めでないのに寄せ集めであるとして、その成績評価方式を決定しているのである。

そして、オリンピック大会は総合体育大会としては、参加選手にとって極めて魅力のない方式を実施していながら、盛りあがりのある大会、意気さかん大会を実施しているのである。国家間の対立を防止し、かつ、その対立に乗って、換言するならば、オリンピック優勝方式によって今日のような盛大なオリンピック大会たらしめているという。

第5表に、成績評価原理を決定する因子構造の関係についての対照表をあげ、これによって考察をすすめる。

第5表、オリンピック大会、国民体育大会の成績評価原理を決定する因子構造の関係についての対照表

オリンピック大会		国民体育大会	
オリンピック優勝方式	総得点方式	総得点方式	オリンピック優勝方式
① 世界平和に貢献する。	△ 世界平和に貢献しない。	① 世界平和に貢献する。	① 世界平和に貢献する。
② 国家間の対立を防止する。	△ 国家間の対立を激化させる。	② 県間の対立は激化しない。	② 県間の対立はない。
③ アマチュアリズムを堅持する。	△ アマチュアリズムを破壊する。	③ アマチュアリズムを破壊しない。	③ アマチュアリズムを堅持する。

オリンピック大会のオリンピック優勝方式は、これまで推論した如く、世界平和に貢献し、国家間の対立を防止し、アマチュアリズムを堅持するが、これに総得点方式を使用せんか、第5表に示してあることから困難な問題が続発し、オリンピック大会を継続することができなくなる事態を引き起こすことになるであろう。

国民体育大会にオリンピック優勝方式を実施せんか大会の盛りあがりを期待できない結果におちいり、これに総得点方式を使用してもその期待を或る程度向上させるだけにとどまるのみである。すなわち、オリンピック優勝方式では県間の対立はないが総得点方式では激化させない程度しか期待できず、アマチュアリズ

ムを堅持するのに対して破壊しない程度しか大会の盛りあがりを期待できないのである。団体優勝をかけた大会であるから当然・活気あふれる大会を期待できる筈であるが、総得点に対する人口支配が決定的であるために、総合順位は人口順位に固定してしまい総合優勝を争う魅力を失ってしまう結果になる。かように考察してみると、国民体育大会は団体優勝制によって十分に魅力を生ずるようにしていながら、実際は特定大人口擁護、有利にとどまりその他の絶対多数の各県はいかに頑張っても人口順位と同じ順位に甘んじなければならない結果を引き起しているのに、オリンピック大会によるオリンピック優勝方式は魅力のなさそうな方式でありながら大会を盛大に開催しているのである。まさにこれは、民族的意識感情の成績評価方式における相違からくる結果にほかならないのである。

オリンピック大会におけるオリンピック優勝方式は現状のまま何等かえる必要を認めないが、国民体育大会における総得点方式は絶対多数の各県のスポーツの普及水準をより活潑に期待することがむずかしいことから、何等かの改善方策を打ち出すべきであると考ええる。この際、最も大切なことは、オリンピック大会におけるオリンピック優勝方式の如く、オリンピック・ムーブメントの推進に役立つように、国民体育大会における第1目的である普及水準の向上をはかることを期待する成績評価方式を考え出すべきである。

本研究にあたって、保健体育科教室、助教授、岩淵直作氏に懇切なる御指導を賜わったことに対し深く感謝の意を表する。

#### 引用、参考文献

- (1) 岩淵直作；著書「スポーツ観の原理」蘭書房、1～203、昭和32年6月
- (2) 岩淵直作；進学適性検査成績とスポーツとの相関について、日本体育学会誌「体育学研究」第6号298～384、昭和28年11月
- (3) 岩淵直作；総合体育大会における採点方式についての研究（第1報）、「体育学研究」第7号448～460、昭和29年5月
- (4) 岩淵直作；総合体育大会における採点方式についての研究（第2報）、副題、国民体育大会の天皇杯総合優勝採点方式について、「体育学研究」第9号592～603、昭和30年5月
- (5) 岩淵直作；スポーツ記事面積の年間変動について、「新聞研究」No.52 27～31、昭和30年11月
- (6) 岩淵直作；総合体育大会における採点方式についての研究（第3報）、副題、国民体育大会の天皇杯総合優勝採点方式について、「弘前大学教育学部紀要」第1部第1号1～36、昭和31年6月
- (7) 岩淵直作；総合体育大会における採点方式についての研究（第4報）、副題、国民体育大会の天皇杯総合優勝採点方式について、「スポーツ観の原理」7～30、昭和32年6月
- (8) 岩淵直作；DIE SPORTBERICHTERSTATTUNG IN DER JAPANISCHEN TAGESPRESSE  
ドイツの“Publizistik”の第3巻第5号292～296、昭和33年9月、10月号
- (9) 岩淵直作；総合体育大会における採点方式についての研究（第7報）、副題、特に国民体育大会の配点基準問題について、「弘前大学教育学部紀要」第10号13～40、昭和37年10月
- (10) 岩淵直作；総合体育大会における採点方式についての研究（第8報）、副題、特に人口と機能的体力指標との関係についての人口学的考察、「弘前大学教育学部紀要」第11号33～41、昭和38年9月
- (11) 岩淵直作；総合体育大会における採点方式についての研究（第9報）、副題、オリンピック大会・国民体育大会とスポーツ選手権大会の目的、「弘前大学教育学部紀要」第12号92～107、昭和39年6月
- (12) 岩淵直作；A research into the relation between the Olympic Movement and the system of evaluation,  
オリンピック図書館保存論文、昭和39年3月
- (13) 岩淵直作；Study on the Results Evaluation Formulas of the Tokyo Olympic Games、「弘前大学教育学部紀要」第16号B29～37、昭和41年3月
- (14) 岩淵直作；Research into the Olympic Movement and its Influence upon Physical Education, Proceedings  
of International Congress of Sports Sciences, 519～520、昭和41年6月
- (15) 岩淵直作；Improved Measures for Problems relating to the Results Evaluation of the Olympic Games,  
「弘前大学教育学部紀要」第17号A48～58、昭和42年3月
- (16) 岩淵直作、渡辺弘；運動能力評価における回帰を用いたTスコア表の作成、日本体育学会誌「体育学研究」に掲

載決定済

- (17) 岩淵直作；Olympic Games等における成績評価方式の体系化に関する研究(第1報)，弘前大学教育学部紀要 第19号
- (18) 岩淵直作；同上(第2報)，弘前大学教育学部紀要第19号
- (19) 岩淵直作，渡辺弘；運動能力評価における回帰評価についての分析的研究，「弘前大学教育学部紀要」第18号
- (20) 岩淵直作，佐藤光毅；オリンピック大会の成績評価史的研究，日本体育学会口頭発表，昭和40年8月。
- (21) 浅井浅一；体育における文化の根源について，「体育学研究」第8巻第3，4号43～49，40年2月